

文化・芸術

「線の形象2020—12」

2020年、岩絵の具、水彩ほか、紙
31・6号×79・1号
(作者寄贈)

菊地武彦 (1960年)

菊地武彦さんは栃木県足利市に生まれ、多摩美術大学油画科で学んだのち、1990年代から絵画の最初の行為でもある「線を引く」をテーマに取り組み、独自の画境を展開しています。「線の気韻」「土の記憶」シリーズを経て、近年は線を同じ場所に何度も重ねることでもかたちが現れる瞬間を捉えた「線の形象」シリーズを手がけています。

本作は画面下部からならかな山形に地層のように線が重ねられ、線の層の深部には、これまでの制作の絵の具の痕跡がついた紙片

〈名画の扉〉

がコ
ラー
ユされ
ています。小品ながら、本作を遠くから眺めるとき、緩やかに裾を広げるはるかなる山のようにも見えるでしょう。

深い色に粒子がきらめく岩絵の具の線の重なりは、層を含んだ岩石のように、時間を凝縮した存在を思わせる濃厚さがにじみ、余白に散る絵の具の点の浮遊感と相まって、果てしない時空を感じさせます。(大谷)

2024年新収蔵作品から